

リオネル・グルーと  
両大戦間のフランス系カナダ・ナショナリズム

Lionel Groulx et le nationalisme canadien-français  
de l'entre-deux-guerres

立花 英裕  
TACHIBANA Hidehiro

Résumé

Le présent article examine les idées nationalistes de Lionel Groulx ainsi que son rôle historique. Son discours nationaliste contribua beaucoup à la naissance de mouvements nationalistes séparatistes fascisants des années 1930, tels que ceux de Paul Bouchard ou Walter-Patrice O'Leary. Pourtant ses textes politiques laissaient toujours des marges rhétoriques d'interprétation entre autonomisme et séparatisme. Il prenait d'ailleurs soigneusement une distance avec les idées séparatistes sans perdre complètement la sympathie de la part des nationalistes séparatistes. Les événements survenus dans la carrière de Groulx nous laissent pourtant croire que sa position hiérarchique dans l'Église l'empêchait de développer librement ses idées politiques : il écrivit dans une correspondance : « J'aimerais mieux me tromper avec l'Église que de prendre le risque d'avoir raison contre Elle ». *L'Action française* de Montréal dont il était le rédacteur en chef cessa de paraître deux ans après la condamnation de *L'Action française* de Charles Maurras par le Pape. Cette perte de l'organe qui dominait le paysage nationaliste de l'époque arriva au moment de la promotion de Lionel Groulx à l'Université de Montréal. Cette coïncidence est éloquent. Les difficultés du nationalisme catholique canadien-français produisirent les renouvellements du nationalisme séparatiste dans les années qui les suivirent. Le thomisme de Jacques Maritain et le personnalisme y jouèrent un rôle important.

キーワード:ケベック、カナダ、ナショナリズム、アクション・フランセーズ、  
静かな革命

Mots-clés : Québec, Canada, nationalisme, Action française, Révolution tranquille

はじめに

両大戦間のフランス系カナディアン・ナショナリストの中でもリオネル・グルーは飛び抜けて大きな存在である。それだけに論争を呼びがちな思想家であり、「20世紀のフランス系カナダの人物の中でも最もよく研究されている一人」(Noël, 2011, p.11)とされている。

ケベックにおけるナショナリズムは、いわゆる両大戦間の時代から第二次世界大戦後にかけて大きく変貌し、以前の「フランス系カナダ」という想像域 (imaginaire) をベースとしたものから「ケベック」という想像域をベースとしたものに転換した。そこには連続面と切断面の両面がある。何が連続していて、何が切断されたのだろうか。本論は、部分的にはあるが、1920年代、30年代の代表的なナショナリストとしてのリオネル・グルー (Lionel Groulx) を通して、この問いに答えようとするものである。

## 1. リオネル・グルーのプロフィール

まず簡単に彼のプロフィールを見ておこう。

リオネル・グルーは、1878年にケベック州のヴォードルイユ (Vaudreuil) に生れている。1900年からコレージュ・ド・ヴァリーフィールド (Collège de Valleyfield) の教員を勤める傍ら聖職者を目指し、1903年に司祭の資格を取得している。1906年からイタリアとスイスに留学、神学、哲学、文学の勉強をした後、1909年に帰国、元の学校の教職に戻るが、その頃からフランス系カナダの歴史研究に専念するようになる。歴史学に転進した理由は彼自身の選択というよりは、教会ヒエラルキーの中で命じられたためだった。1915年には、アンリ・ブラサ (Henri Bourassa) の後押しで、モンレアル大学の初代の歴史学教授に就任する。そして、1949年に定年で退職するまで、この地位に留まるのである。

グルーはコレージュ教員時代からナショナリスト・グループと交流があったが、モンレアルでは、そうした活動が通常の学術活動の枠を大幅に超えるようになる。特に、1920年に雑誌『アクション・フランセーズ (Action Française)』の編集主幹に就任すると、編集方針を大胆に刷新して、政権批判やナショナリズム論など、広範なテーマを扱い、彼自身も意欲的な論説を書き、機会がある毎に精力的に講演を行った。『アクション・フランセーズ』

には出版部門もあったが、そこでも様々なジャンルの本を刊行し、読者層の拡大のために、人の心を打つような小説さえ発表している。こうして、グルーはフランス系カナダの強力なオピニオン・リーダーになっていくのである。「静かな革命」期には彼の影響力は弱まるが、それでも無視できない存在だった。極めて長い期間、社会的影響力を及ぼしたグルーは、フランス系カナダの中でも希有な知識人と言わなければならない。

## 2. 20世紀初頭の政治・社会状況

リオネル・グルーは、多くの心酔者を擁する新しいタイプの知識人として登場した。その背景にはフランス系カナダ人が置かれた状況があった。当時、カナダのコンフェデレーション体制に対して強い疑念が生じていたのである。体制内で彼らが独自性を維持できるどうかを疑わせるような出来事が次々に起こっていたからである。

コンフェデレーション体制の法的な根拠である1867年の英領北アメリカ法には、第92条に、州政府が独自に法律を制定できるという規定がある——「各州の立法府は、それぞれの州において、次の各号の範囲に含まれる事項に関して、排他的に、法律を制定することができる」（日本カナダ学会編、2008、p.60）。この条項は、16項の細目によって規定がなされている。フランス系カナダ人は、コンフェデレーションに反対したルーージュ党がいたように、その成立時には全面的に支持したわけではないとしても、1867年の英領北アメリカ法によって、2つのネイション（英系カナダとフランス系カナダ）が平等の立場で新たな国家建設に乗り出せるのではないかという期待を抱いていた。

その期待は次々に裏切られていく。最初の衝撃は、1885年のルイ・リエル（Louis Riel）処刑だった。ルイ・リエルの率いる民衆運動は、マニトバのコンフェデレーション加盟問題に端を発している。というのも、当初はメティス（先住民と白人の混血）たちの土地の所有権が認められなかったのである。交渉は難航したものの、最終的にメティスへの土地の委譲を認めることを条件としてコンフェデレーション加盟（1870年）の調印がなされる<sup>1</sup>。ところが、その後大量に移入してきた者たちによってそれが反故にされ、メティスたちが土地から追い出されてしまう。ルイ・リエルの叛乱は、窮地に追い込まれたメティスたちの怒りの爆発だった（Comeau, 2010, p.64）。それがルイ・リエルの絞首刑によって終わったのである。以後、コンフェデレーショ

ン体制への疑念がフランス系カナダ人の間に広がっていく。この事件を見て分離主義者になった一人に、教皇権主義者ジュール＝ポール・タルディヴェル (Jules-Paul Tardivel) がいる (Comeau, 2010, p.63)。

教育問題も大きな懸念の一つだった<sup>2</sup>。カナダの各地で、フランス語による学校教育が受けられなくなる変革が推進されたのである。1897年にマントバ州でフランス語教育廃止の措置がとられ、1912年にはオンタリオ州でも同様の措置がとられた。ケベック州の人々には、コンフェデレーションがフランス語話者を減少させる体制なのではないかと疑い、いずれケベック州もその対象になりはしないかと不安をいだくようになる。

このような状況の中で、パピノーの叛乱の挫折以来、眠っていたナショナリズムが再び活性化したのである。だが、この時点でのナショナリズムは、基本的に1867年の英領北アメリカ法とその精神の遵守を訴えるものだった。その代表的な論客が、アンリ・ブラサである。弁舌の巧みな彼が英雄的な存在になったのは、とりわけ、南アフリカでのボーア戦争に際して張った論陣によってである。ブラサは、イギリスが戦争遂行のためにカナダに派兵を要請したことに激しく抗議した。彼によれば、ボーア戦争は決してイギリス国民保護を目的としているのではなく、商業的な目的に貫かれた帝国主義戦争だった。そのような戦争にカナダが参加する意味はまったくないというのが、彼の主張だった。その歯に衣を着せぬ発言は、フランス系のみならず、カナダ全体の良心を揺さぶる力があつた。

ようするに、英系カナダ人とフランス系カナダ人とでは、英領北アメリカ法に対する理解が異なっていた。英系カナダ人から見れば、コンフェデレーションは国民国家ではなく、あくまで自治領だった。「したがって、英系カナダ人は、この1867年のカナダ連邦結成を、フランス系カナダ人との契約として成立したとは見ていない」(荒木, 2015, p.23)のである。しかし、アンリ・ブラサに言わせれば、コンフェデレーションは2つのネイションの相互理解を基盤にした国家の成立にほかならなかつた。この認識の隔たりをどう捉えるにせよ、カナダにおけるナショナリズムの覚醒は、アンリ・ブラサに代表されるフランス系カナダ人から始まったと言える。ジェラルド・ブシャールは、当時の状況を次のように記述している。「2つのネイションという偉大な夢があつた。それは新生の国が、2つのネイション(フランス系カナダ人と英系カナダ人)の発展を平等に、2つの大洋の端から端まで支えてくれるだろうという夢だったが、それが崩れ始めたのである」(Bouchard, 2003, p.35)。

ブシャールの言う「偉大な夢」の覚醒と危機が、フランス系カナダ人にとって歴史的転換点となる。アンリ・ブラサの弁舌は、ナショナリズムの言説が展開する言語空間を開いたのである。ところが、1910年代に入ると、そのブラサに突然の変化が現れる。彼はにわか政治活動を縮小し、国会議員としての活動を辞め、新聞『ル・ドゥヴォワール (Le Devoir)』の経営に専念し始めるのである。ブラサの豹変は、ケベック州の政界・論壇に大きな空白を生む。そこに第一次世界大戦が勃発し、再びカナダはイギリスから派兵を要請されるのである。この徴兵問題が切っ掛けとなり、フランス系カナダ人の内に鬱積していた不安と焦燥が爆発的に吹き出す。「ナショナリズムの面から見れば、1917年の徴兵危機は、1867年以来（メティスの叛乱、マニトバとオンタリオの学校におけるフランス語禁止、ボーア戦争）コンフェデレーションを印づけてきたフランス系カナダと英系カナダの間の激しい危機の頂点をなすものだった」（Comeau, 2010, p.76）のである。徴兵問題を通して、フランス系カナダ人は、アンリ・ブラサが説いていた2つのネイションの相互理解を当てにしては自分たちの権利を守れないと痛感したのである。しかし、それを政治的な力にするオピニオン・リーダーが欠けていた。そこに登場したのがリオネル・グルーだった。

### 3. ナショナリズムにおける2つの潮流とリオネル・グルーの位置

ここで、フランス系カナダ・ナショナリズムについて整理しておこう。フランス系カナダにおける「ナショナリスト」とは、必ずしもコンフェデレーション離脱を望む者たちだけを指しているわけではない。マチュー・ノエルは、自治主義と独立論=分離主義を次のように説明している。

自治主義 (Autonomisme) とは、フランス系カナダ人に対してカナダの中でより大きな自治を与え、彼らの憲法上の諸権利が尊重されることを望んでいる人々の立場を指している。彼らは、しばしば、州の権限に属する領域に連邦政府が介入することを批判し、1867年の憲法がケベックに付与している諸権利を要求する。しかし、彼らは、自分たちの州がカナダ・コンフェデレーションの中で発展し、繁栄することが可能だと見なしている。(Noël, 2011, p. 10.)

独立派 (Indépendantistes) は、ケベックが十全な発展を遂げるためには、カナダから、政治的・経済的な独立を獲得しなくてはならないと信じている。彼ら

の判断によれば、コンフェデレーションはケベックの人々の自己実現を妨げている。なぜなら、ケベックの人々を、英語系多数派の意志に追従しなければならない少数派の立場に押し込めるからである。独立派がカナダ・コンフェデレーションからのケベックの離脱を要求するのは、そのためである。(Noël, 2011, p. 10.)

コンフェデレーションの枠内でフランス系カナダ人の権利を維持・拡張することを主眼とする自治主義者は、「要求のナショナリスト (Nationalistes revendicateurs)」とも呼ばれていた。分離主義者は、予測されるコンフェデレーションの崩壊後に、あるいは崩壊を待たずに離脱して、独立国家を建設すべきだとする人々である。この時期の分離主義を理解するには、戦後の国際関係の変動も考慮に入れる必要がある。大英帝国が顕著な衰えを見せる一方で、アメリカ合衆国に日の出の勢いがあったため、コンフェデレーション体制が維持できない事態がいずれ来るかもしれないという危惧が漂っていたのである。

いずれにしても、1920年代、1930年代の分離主義者がごく少数だったことは言うておかなければならない。公然と分離主義を標榜したのは、新聞『ラ・ナシオン (La Nation)』に拠ったポール・ブシャール (Paul Bouchard) や、「青年愛国者 (Les Jeunesses patriotes)」のウォルター・パトリス・オレリー (Walter-Patrice O'Leary) くらいである。この時期の分離主義者は夢想家の側面があったようである。独立国をどのように実現するのか、国境をどこに引くのか、どのような国家体制にすべきかについて青写真を用意している者はいなかったのである。

このような自治主義と分離主義の図式の中にリオネル・グルーを置くなら、多くの論者が認めるように、彼の立ち位置の曖昧さが際立つ。そのため、彼の壮大な未来を語る修辞に心酔するポール・ブシャールのように、彼を独立派に引き寄せようとする者たちと、あくまで自治論の枠の中で彼の発言を捉える者たちとの間で綱引きが生じた。この論争は形こそ違え、現在も続いていると言ってよく、そこに各研究者の思想的立場が窺える。スーザン・マンは、グルーの『アクション・フランセーズ』について、「そのメッセージのどの部分を文字通りに受けとめ、どの部分を隠喩として捉えればいいのかという点になると、いつでもむしろはっきりしない」(Mann, 2005, p.17) と指摘している。近年の研究傾向は、グルーの思想をそれ自体として救い出そうとする研究と、

時代の流れの中に置き、「静かな革命」との関係性を究明しようとする研究に大きく分けられる。リオネル・グルーは14,000通もの書簡を残しており、その刊行が進行中であるが、彼を自治主義者と見なすマチュー・ノエルは、書簡を初めとする、未刊行・未公開の資料を通してグルーの思想を解明する研究を評価している。他方、シャルル＝フィリップ・クールトワ（Charles-Philippe Courtois）のように、グルーが社会的に与えたインパクトを重視し、彼の思想、あるいは『アクション・フランセーズ』の諸論文を、後の「静かな革命」の理念・政策との関係の中で読み直す研究がある。スーザン・マンによれば、『アクション・フランセーズ』は、ラフレッシュ、タルディヴェル、ブラサらの宗教的ナショナリズムと、1960年代、70年代の脱宗教的なナショナリズムの中間にある」（Mann, 2005, p.171）。

ジェラルド・ブシャールの研究（Bouchard, 2003）は視点が異なり、グルーの思想的統一性を予定調和的に想定するのではなく、むしろ矛盾した発言に満ちた自己分裂の思想家と見なし、そこにフランス系カナダ人の思考様式を読み取ろうとしている。ブシャールは、グルーの膨大な発言を時事的なコンテキストから切り離して、思想的テーマ毎に分類した上で分析する。時に、グルーの思想が分解・解体された印象を与えないこともないが、そこから伝統主義的側面と革新的側面を引き出している。そうした分析を通して、次第に、グルーだけに留まらない、ケベックの人たちの自己表象の揺れ、アイデンティティの揺れを抉りだすのである。ブシャールのグルー論に対しては厳しい批判が目立つが、彼の研究の根底に流れる自己批判的視点、ケベック・ナショナリズムのネガティブな面も怯むことなく論じる姿勢は、他の研究者には見られない特質である。

#### 4. リオネル・グルーの「ドクトリン」

リオネル・グルーは、「ドクトリン」という言葉を愛用する。彼のナショナリトとしてのドクトリンは、一言で言えば、フランス系カナダ人としてのネイションをカトリック信仰とフランス語に結びつけ、いわば三位一体のものとして捉えるところにある。この三位一体を体現しているのが「フランス魂」である。グルーは、フランス系カナダ人に向かって、各人の内部に宿っている「フランス魂」に目覚め、神からあたえられた種族（race）としての使命を遂行するよう呼びかける。

ネイションとカトリック信仰とフランス語を一体のものとして捉える見方

は、彼の独創ではない。既にアンリ・ブラサが、それを簡潔に表現している。「もし我々が言語をその源から養うことをせずに死んでいくのにまかせるなら、消滅することだろう。言語が死んでしまえば、国民の魂も死ぬだろう。そして、国民の魂が死んでしまえば、信仰も同様に死ぬだろう」(Mann, 2005, p.23)。とはいえ、グルーほど、この三位一体の思想を言葉豊かに展開した人はいない。グルーは、フランス系カナダ・ナショナリズムの最大のイデオログなのである。

リオネル・グルーは、「フランス魂」を詩的に、隠喩をふんだんに用いて表現する。とりわけ目立つのが、「生命」に結びついた比喩である。そこから人間集団が植物的な成長のイメージの中で捉えられるのである<sup>3</sup>。スーザン・マンは、カトリック聖職者が一般に人間の身体を比喩に用いるのに対して、グルーが生物学的イメージに訴えるのは奇妙だと指摘している。しかし、グルーの比喩を、近代ナショナリズムの思想的文脈の中に置くならば、そこに啓蒙思想的自然観が隠れているのが見えてくる。グルーの説く根源的な魂は、フィヒテが連続講演『ドイツ国民に告ぐ』でドイツ人に覚醒を訴えたドイツ魂、あの、言語と生命が一つに融合した概念に通じている。グルーは、魂と生命を分離するデカルトの有名な動物機械論とは違って、魂と生命を一体のものとして捉える生命観をもっている。生命は、単に神から与えられた固定的・普遍的なものではなく、自然環境などの要因によって形成され、歴史的に展開していく各民族に固有なものなのである。ここには、フィヒテ的な種族的ナショナリズムだけでなく、環境に応じて形成される文化・民族というヘルダー的な風土論も読み取れるのである。

グルーは、生命力に満ちた人間を礼賛する。グルーの神は、罪深い人間に掟を課すよりは、むしろ肯定的な生命を人間に吹き込む存在である。グルーは、先住民の女と同棲するクルール・ド・ボアのように、キリスト教的道徳から逸脱した男たちにも寛容であり、それどころか、新世界を探索した者たちにこそ「フランス魂」を見るのである。フランス人による植民地活動にはなんら批判すべきところはない、と言うのである。グルーが待ち望むのは、過去の英雄精神を現代に復活させ、フラン系カナダ人という種族を力強く導いてくれる英雄の到来である。彼から見れば、フランス系カナダ人の大部分は、まだ真の意味での自己意識に目覚めていない。そこから、フランス系カナダ社会への手厳しい批判が始まるのである。

現代社会の物質主義に対するグルーの批判は、時に第三共和政のフランス、

そして、経済的繁栄を謳歌するアメリカ合衆国に向けられるが、それ以上に、アングロ・サクソン系の文化や経済生活を受け入れるフランス系カナダ人に向けられている。アメリカ合衆国から入ってくる新しい娯楽、とりわけ映画に惹きつけられる人間への警告は厳しいものがある。彼にとって、民主主義、議会主義、政党政治は墮落以外のなにもものでもなかった。そして、連邦政府の政策に加担し、フランス語学校の閉鎖を率先して進めるようなフランス系政治家や聖職者に対する批判は痛烈極まりないものだった (Mann, 2005, p.23)。

## 5. 『アクション・フランセーズ』、創刊から終刊まで

リオネル・グルーの社会的発言は月刊誌『アクション・フランセーズ』を拠点としてなされた。彼の名は分がちがたく、この雑誌に結びついている。『アクション・フランセーズ』を得てはじめて、グルーは彼にふさわしい舞台に立ったのである。雑誌の凋落もグルーの人生の曲折に結びついていた。事実、グルーが編集主幹を辞め、雑誌名が変更されてからは、急速に勢いを失うのである。

『アクション・フランセーズ』には、母体となる団体があった。「フランス語権同盟 (La Ligue des droits du français)」というのだが、1913年3月に神父アルシャンボー (le père Archambault) と弁護士ゴヴロー (Dr Gauvreau) を中心に設立されている。主な設立目的はフランス語擁護である。とりわけモンレアルにおけるフランス語の日常的な問題に熱心だった。たとえば、商業活動におけるフランス語使用を奨励した。当時、フランス系カナダ人の実業家たちに英語使用が広がっていたのである。アルシャンボーらは運動推進のために知恵を絞った。そうして立案されたのが、大衆向けの暦とエリート向けの学術誌発行だった。まず『フランス語暦 (*l'Almanach de la langue française*)』は1916年に発行された。これが思いの外成功を収め、長期に亘って貴重な財源となる。その財源を糧にして翌年に創刊されたのが、学術誌『アクション・フランセーズ』である。

リオネル・グルーは1917年に「フランス語権同盟」に加入している。そして、創刊まもない雑誌にすぐさま寄稿するのである。おそらく評判がよかったのだろう。1918年には編集を実質的に任せられ、1920年10月には、初代の編集主幹オメール・エルー (Omer Héroux) に代わって、正式に編集主幹の座につく。彼は直ちに編集方針を一新し、フランス語問題だけでなく、フラ

ンス系カナダにかかわる諸問題を幅広く取り上げる。母体の「フランス語権同盟」も「アクション・フランセーズ同盟」と改名された。グルーは、毎年、年間テーマを定め、それに沿った編集をした。たとえば、1921年は「経済問題 (Le problème économique)」、1922年は「我々の政治的将来 (Notre avenir politique)」、1923年は「我々のカトリック的性格 (Notre intégrité catholique)」といった具合である。なかでもとりわけ1922年の「我々の政治的将来」、1927年の『アクション・フランセーズ』のドクトリン (La Doctrine de l'Action française)」(この年はコンフェデレーション設立 60周年に当たっていた) は大きな反響を呼び、1930年代の独立派グループの登場に繋がるのである。

しかし、1927年を頂点として、雑誌を取り巻く環境は急速に悪化する。もともと教会や自由党ケベック州政府からよく見られていなかったが、フランスで起こったある事件を切っ掛けに、様々な圧力が雑誌に加えられるようになる。それというのも、パリの同名の雑誌『アクション・フランセーズ』がローマ法王の怒りを買ったのである。

フランスの『アクション・フランセーズ』とローマ教会との関係が急激に悪化したのは、ピウス 11 世の時代だった。最初は、ボルドーのアンドリュエ枢機卿が雑誌に対する諫言を表明し、それにピウス 11 世が賛意を表すという抑制的な方法がとられたが、モーラス側はあくまで誤解だとして、強硬に反論したため、ピウス 11 世は異端宣告に踏み切る。1926年 12月のことだったが、ここまで事態が深刻になると、モンレアルの雑誌のメンバーたちも、対岸の火事として眺めているわけにいかなくなる。ケベック州は、フランス共和国とは違って、教会がはるかに強大な社会的影響力をもっている。実際、まもなくモンレアルの雑誌にも、ローマ法王の譴責が出されるのではないかという噂が立ち始める。リオネル・グルーは、表向きは意に介さないような顔をしていたが、内心は穏やかではなかったようである。私信では、「私は、教会に反して正しくあるリスクを冒すよりは、教会と共に誤る方を好む」(Mann, 2005, p.145) と洩らしている。

モンレアルはパリから遠く離れているとはいえ、法王から弾劾された『アクション・フランセーズ』と同名の雑誌を刊行しつづけることは日に日に難しくなっていった。なによりも多くの読者にとって、雑誌が以前のように輝かなくなった。リオネル・グルーは編集主幹を辞し、1928年 1月号から『アクション・カナディエンヌ・フランセーズ』と雑誌が改名される。しかし、各方面からの圧力は納まらなかった。日刊紙『ル・ソレイユ (Le Soleil)』は、

1927年秋から『アクション・フランセーズ』を批判するキャンペーンをはじめ、政府を弁護する記事も連続的に掲載した。『ル・ソレイユ』はケベック市の自由党系の新聞である。背後にタシュロー首相が控えているのは疑いの余地がなかった。

同じ頃、モンレアル大学では、リオネル・グルーの昇進が理事会で審議されていた。教職歴10年のグルーが、専任の教授への昇格と昇給を申請していたのである。しかし、学長のピエットは、『アクション・フランセーズ』の記事に不快感を抱いていた。審議はこれといった理由もなく長引いた。審議過程においては幾つかの要求が突きつけられたようだが、社会的支持を背にグルーは容易には妥協しなかったようである。しかし、彼が『アクション・フランセーズ』編集主幹を辞任すると、なぜか急速に審議がはかどり、1928年7月、昇格と昇給が実現する。給与は2400ドルと定められた。スーザン・マンは、そこに明らかな相関を見ている。グルー自身が洩らしていることだが、彼には抑えがたい社会的上昇志向があった。老獪に振る舞う策士の面もあったようである。この昇進問題に典型的に見られるように、思想の一貫性と社会的名誉との間で選択を迫られると、社会的地位を優先させたようである。

## 6. リオネル・グルーの「フランス国 (L'État français)」論とその反響

グルーは、1922年の『アクション・フランセーズ』の年間テーマを「我々の政治的将来」とし、1月号に彼自身の論文を編集部 (La Direction) の名前で巻頭に掲げている。

この記事は、フランス系カナダ人による独立国の可能性を語るものだったが、論を起すにあたって、まず当時の世界情勢を俯瞰している。それによれば、第一次世界大戦後、アメリカ合衆国の躍進による太平洋の時代が到来したのである。グルーは日本の華々しい登場にも触れている。他方、大西洋側のヨーロッパは勢いを失い、大英帝国の没落は誰の目にも明らかだと言う。将来的には、カナダのコンフェデレーションが解体する可能性があると言診している。周知のように、19世紀を通じて、アメリカ合衆国はカナダの併合を試みたり、ケベック州に合衆国への参入を呼びかけたりしていたが、大英帝国が衰えれば、強大な経済圏を形成したアメリカ合衆国に隣接したコンフェデレーションが危うくなるというのが、グルーだけでなく、当時の社会全般に広がった見方だった。グルーは、そこに「ケベックの力」が活動する余地が生じていると考える。ただし、それにはフランス系カナダ人の意識変

革が伴わなければならなかった。

我々自身であること、絶対に我々自身であること、摂理が望む時が来たら直ちに独立したフランス国を構成すること、以上が、今日という日から、我々の辛苦がそこで生氣を得る希求なのであり、もはや二度と火が消えてはならない松明なのである。この夢は、薄暗がりの中、限られた者たちだけの小さな集まりの中で養われるわけにはいかない。松明は、柀の下からシャンデリアへと移されなければならない。(Groulx, 1926, pp.163-164. 傍点引用者)

このような文を読まされては、グルーを分離主義者と見なす読者が出てきても不思議ではない。たしかに幾つかの留保条件が読み取れないこともない。独立国の建設がコンフェデレーションの解体後だというのであれば、遠い将来の「夢」を語っているにすぎないことになる。また、ここで語られている独立国はコンフェデレーションの枠組み内に建設されるはずのものと捉えることも可能である。そうなれば、「この夢」は自治主義の枠を一歩も出ていないことになる。逆の読み方もできる。遠い夢という方が修辞であって、本音は近い将来の独立国建設を構想していると受けとめることもできる。このように、どこがレトリックで、どこが本音なのか分からない書き方をするのがリオネル・グルーである。ただ、彼がここで、フランス系カナダ人に「独立したフランス国」を建設する権利が本来的にあると公言していることは否定しようがない。

グルーは、結びの言葉を若い世代に向けている。

この運命を、我々は、とりわけ我々の種族の若者たちに差し出すのである。ものを考える若者たち、偉大な事柄の建築家であり労働者である若者たちに向けて差し出すのである。もし、この理想が彼らにふさわしいものであるなら、彼らがこの理想を彼らの精進を律するものとし、決定的な時が訪れた時に遅れをとらないように突き進んでほしいのである。(Groulx, 1926, p.165.)

リオネル・グルーの言葉は若者たちに届いたようである。1932年12月にはモンレアル大学の学生たちによって「青年カナダ (Le Jeune Canada)」が結成される。リーダーはアンドレ・ロランドー (André Laurendeau) だった。後に『ル・ドゥヴォワール』編集主幹の地位につき、ピアソン政権時代に二言

語二文化調査委員会の委員長を務めた、あのロランドである。一説によれば、リオネル・グルー自身がモンレアル大学内に学生たちを集めて結成させたグループだとも言われている。「青年カナダ」は、ごく少数のエリートしか会員として認めない閉鎖的なグループだったが、彼らが主催する講演会は大衆的な人気を集め、ちょっとした事件になることさえあった。

1930年代後半になると、より広範な社会層を背景としたナショナリスト・グループが前景に出てくる。その代表的な指導者ポール・ブルデューやオレリーもグルーの言葉に感激した青年だった。ポール・ブルデューはケベック市を拠点として独立派新聞『ラ・ナシオン』を1936年に創刊している。彼は、この年の2月15日付の新聞に「新しき勢力 (Les forces nouvelles)」と題する記事を掲載し、その中で「1922年の分離主義は、ある愛国的なエリートの思想だった。彼は、カナダ連邦からのケベックの分離がユートピアではないことを証明しようとした」と書いている。「ある愛国的なエリート」とはリオネル・グルーに他ならない。ブルデューのライヴァルだったオレリーはモンレアル市で1935年11月に「青年愛国者」を設立している。「青年カナダ」がグルーだけでなく、人格主義の影響も受けていたのに対して、1930年代後半のナショナリズムを牽引したブルデューやオレリーはファシズムになびき、ムッソリーニに新しい時代の指導者を見ていた。しかし、「アメリカに自由なフランス国を創造する」という、『ラ・ナシオン』(Noël, 2011, p.95)に発表されたポール・ブルデューの言葉は、グルーから受け取った思想にほかならず、ファシスト的傾向の者ばかりではなく、1930年代を通じて多くのナショナリストたちに共有されていた「夢」だった。

リオネル・グルーは、こうした若い世代のナショナリストを憎からず思っていたようで、度々、彼らの機関誌に手紙を送ったり、彼らの招きで講演をしたりしている。しかし、そこには微妙な揺れや変化もあった。マチュー・ノエルによれば、1930年代の後半になると、グルーは若いナショナリストたちと緊密な関係を維持しながらも、一定の距離を失うまいと苦心するようになる。若い世代の分離主義を支持していると見なされれば、聖職者としての地位が危うくなると恐れたからだと思われる。そのため、逆に立場の相違を際立たせることもあった。1936年2月に『ナシオン』紙に送った書簡の中では、分離主義には与しないと明言するのである。

私の結論は分離主義なのかと、あなた方は訊いてくるかもしれない。私は挑

発的に分離主義を教唆することも、それを性急に進めることも拒絶する。道徳的低下、否むしろ道徳的・国民的ニヒリズムの中で我々があがいている現状では、そのような冒険に乗り出しても、結局は別の主人に仕え、別の鎖に繋がれてしまうだけだろう。私たちの現在の病は、政治的であるだけでなく、国民としての存在の病でもあるのだ。このことは以前にもお話したことがある。フランス系カナダ人の大きな欠陥は、フランス系カナダ人が存在していないことなのだ。私たちが緊急にやらなければならないことは、そのためによき意志をもったあらゆる人々と手を合わせることである。そこに、私たちの精神的再生の仕事がある。

この書簡は、『ナシオン』紙を拠点としたナショナリストたちにとって晴天の霹靂だった。翌年3月に『ナシオン』紙は方針を大転換し、分離主義の放棄を宣言する記事を掲載している。それは『ナシオン』の思想的破綻だったと言える。少なくとも、もはやその存在意義は希薄化していくしかなかった。以後、分離主義的ナショナリズム運動はグルーから遠ざかっていくことになる。

リオネル・グルーの限界は、ローマ教会に属する聖職者としての立場とナショナリストとしての思想家の立場との間に越えがたい矛盾があったことにあると、筆者は考える。カトリックの枠組みの中でのナショナリズム運動は、教会による束縛をまぬがれないことが明らかになったのである。フランス系カナダのナショナリズムはデュプレシ政権のような時代には抑圧されるものの、水面下においては試行錯誤的な模索が持続し、徐々に脱宗教化に傾いていくと考えられる。

ポール・ブルデューのようにムツソリーニを称賛する者たちにとっては、グルーの否認は精神的支柱の喪失だろうし、政治的方向を見失う出来事でもあったろう。しかし、フランス系カナダのナショナリズム全体にとっては、新たな時代の到来を予告するものだったと思われる。まもなく第二次世界大戦に入ると、教会はフランスのヴィシー政権への親近感をあからさまに見せつけるようになる。そして、戦後においては、デュプレシ政権がヴィシー政権に加担した亡命者たちを受け入れるのである。ケベック州は、戦後の世界秩序からはみ出たところで、戦前の社会との連続性を維持しようと「大いなる暗黒時代 (La Grande Noirceur)」を迎えるのである。しかし、リオネル・グルーの思想的権威から離脱し、ドゴール派についたナショナリストたちも

少数ながらいたのであり、彼らこそが戦後の新たなナショナリズムを用意したのである。

この水面下の地殻変動は、小説家ロベール・シャルボノー (Robert Charbonneau)の活動に、その一例を見ることができる。シャルボノーは、雑誌『ルレーヴ』を刊行して、文学者や思想家に大きな影響を及ぼしたが、その活動の根底にナショナリズムがあったことは、第二次世界大戦直後に、ルイ・アラゴンらのフランスの知識人たちと論争したことからも察せられる。この論争については、すでに扱ったことがある (立花、2015) が、ここで注目したい点は、シャルボノーが若い時 (1930年代前半) に「青年カナダ」に参加したが、まもなく方向を転じて、政治的に自由主義的な立場を強めたことである。その転機となったのは、当時のカトリック思想に革新を齎したジャック・マリタン (Jacques Maritain) との出会い (1934年) だった。新トマス主義のジャック・マリタンはフランス人だが、モントリオールを訪れて講演をした機会に、ロベール・シャルボノーは彼と知遇をえる。シャルボノーは、まもなくマリタンの講演を一冊にまとめて出版するが、これが大きな成功を納めるのである。マリタンから感化される中で、シャルボノーはエマニュエル・ムーニエの人格主義に関心を向けるようになり、戦争中はシャルル・ドゴールの自由フランスを支援する出版活動を行う。しかし、戦後になると、彼の献身的協力を忘れたフランスの知識人たちと論争を交わし、「アメリカ人」としての自覚を強めていくのである。シャルボノーの軌跡に、1930年代から40年代にかけて、フランス系カナダ・ナショナリズムがどのような試練を経たかが見て取れるのである。

シャルボノーは、「静かな革命」の時代に忘れ去られていたと言ってよいが、しかし、深いところで「静かな革命」を準備したのである。それを傍証するのが、ガストン・ミロン (Gaston Miron) の回想である。ミロンの伝記作者ピエール・ヌヴェーによれば、この「静かな革命」の精神的指導者は、シャルボノーがルイ・アラゴンらと交した論争を数年後にラジオを通して知り、それが彼の精神変革に大きな役割を果たしたと打ち明けている。彼の出版社レクサゴン設立にしても、ミロンの回想によればシャルボノーのケベック文学自律論に触発されたものだった (Nepveu, 2011, p.100)。

グルー流のカトリック・ナショナリズムから、「静かな革命」における世俗的なナショナリズムを繋ぐ歴史の一こまを、この挿話に見て取れるだろう。フランス系カナダ・ナショナリズムは、戦中から50年代にかけてリオネル・

グルーの保守的なカトリックとは別の地点を見いだし、新たな言説空間を開いていったのである。

## 結論

20世紀前半、とりわけ両大戦間のケベックにおけるナショナリズムの覚醒を「静かな革命」に至る流れの中で捉えたとき、リオネル・グルーが自治主義者だったのか、分離主義者だったのかは、おそらく大きな問題ではない。はっきり言えることは、リオネル・グルーが1930年代に台頭する分離主義的ナショナリズムの、いわば火付け役だったことである。それは、若いナショナリストたちを焚きつけたり、抑制したりして、自分の思想的影響下に置こうとする彼の態度にも由来していた。しかし、他方で、グルーの激しがちな言葉も、実は巧妙にコントロールされていて、当時のカトリック教会の許容範囲から出るものではなかった。いずれにしても、グルーは教会とネイションのどちらを優先させるのかという問題に突き当たらざるをえなかった。そもそも当時のローマ法王庁はヨーロッパを席卷するナショナリズム、さらにはナチズムが信仰の障害になると強く警戒していた。北アメリカ大陸でのカトリック布教は英語で行うという政策があったことも忘れるわけにはいかない。ということは、フランス語に依拠するナショナリズムを貫くなら、英語圏のカトリックとの衝突は避けられないことを意味したのであり、それはローマの意向に反するものだったのである。実際、グルーは度々、アメリカ合衆国在住のフランス系カナダ人に招かれることがあり、そうした機会には出向いて行って説教を行ったのである。

幾つかの留保をつけるにしても、リオネル・グルーの登場がフランス系カナダに大きな思想的転換をもたらしたことはまちがいない。グルーの思想は、農村生活の称賛など、その「時代錯誤的」姿勢が嘲笑の対象になることもあった。しかし、世界的に見れば、農村生活に人間の理想を見た人にはトルストイもいるし、日本にはその影響を受けた武者小路実篤もいる。決して後向きだけの、孤絶した思想ではなかったと、筆者には思われる。リオネル・グルーが、革新的に見えたのは、カトリック思想の枠組みを揺るがすような、いわは非カトリック的な側面をもち、それがしばしば公的なカトリック教義よりも前面に出たからである。すでに述べたように、彼には啓蒙思想的な生命認識、あるいは有機論的民族観が認められる。当時ようやく浮上しつつあった反植民地主義論や反人種差別論に通じる視点も窺われるのである。時代の急

速な変化の中で、リオネル・グルーは折衷主義的ではあるが、新たなタイプの知識人として登場し、人々を強烈に惹きつけたのである。

グルーは、まもなく聖職者と知識人の役割をになうことの限界に突き当たるが、それはカトリック思想を支えにして生きていたフランス系カナダ人たちの限界でもあった。この限界を乗り越えるには、教会から自律した思想的言語空間を開くしかなかったのである。このような思想的ステップを捉えるためにも、リオネル・グルーの思想とその影響の範囲を今一度捉え直す必要がある。

(たちばな ひでひろ 早稲田大学教授)

## 注

- 1 マニトバ協定は 1870 年 5 月 12 日に結ばれ、メティスに 140 万エーカーの土地が与えられることになった。この協定についての日本語文献は少ないので、『フランス系マニトバの歴史』から関連箇所を一部引用しておく。「マニトバ協定の 23 条は、英領北アメリカ法 133 条を下敷きにしている。そこでは、州法および裁判では英語またはフランス語が使用できるとされ、法、登記、調書、広報については両言語で公刊されなくてはならないと記されている。また、マニトバ協定 22 条では、州の助成を受けた宗教系の公立学校制度が保障されている。メティスは、最初の定住者としての権利が認知され、その家族のために 140 万エーカーの土地を受け取ることになった」(Blay, 2010, p.339)。
- 2 州教育の分権を規定する英領北アメリカ法第 93 条を論じた著作として、小林順子『ケベック州の教育』(東信堂、1994 年)がある。特に 49 - 53 頁。
- 3 リオネル・グルーには次のような生命の隠喩を用いた表現が頻出する。「Et pourtant la nation possède une vie véritable, puisque nous voyons ces grands organismes croître et décroître, abdiquer ou lutter, naître et mourir」; « Encore une fois, de quoi est faite la vie nationale ? [...] Vraiment invoquerait-on ici la force aveugle et instinctive qui, dans le végétal ou le pur sensible, ordonne l'être dans sa vie. » (Groulx, 1926, p.235, p.237)

## 参考文献

- 荒木隆人 (2015) 『カナダ連邦政治とケベック政治闘争』法律文化社。
- Blay, Jacqueline (2010) *Histoire du Manitoba français tome 1 sous le ciel de la Prairie des débuts jusqu'à 1870*, Saint-Boniface, Les Éditions du Blé.

- Bouchard, Gérard (2003) *Les Deux chanoines*, Montréal, Boréal.
- Comeau, Robert ; Courtois, Charles-Philippe, Monière, Denis (2010) *Histoire intellectuelle de l'Indépendantisme québécois tome I 1834-1968*, Montréal, VIB éditeur.
- Groulx, Lionel (1926) *Dix ans de l'Action Française*, Montréal, Bibliothèque de l'Action française.
- 小林順子 (1994) 『ケベック州の教育』 東信堂。
- Mann, Susan (2005) *Lionel Groulx et l'Action française / le nationalisme canadien-français dans les années 1920*, coll. « Études québécoises », Montréal, VIB.
- Nepveu, Pierre (2011) *Gaston Miron La vie d'un homme*, Montréal, Boréal.
- 日本カナダ学会編 (2008) 『新版資料が語るカナダ』
- Noël, Mathieu (2011) *Lionel Groulx et le réseau indépendantiste des années 1930*, coll. « Études québécoises », Montréal, VIB.
- 立花英裕 (2015) 「ロベール・シャルボノーとフランス・レジスタンス派との論争をめぐる」日本ケベック学会 『ケベック研究 第7号』、pp.50-66.
- 月刊誌『アクション・フランセーズ』のテキストについては、Bibliothèque et archive nationales du Québec の Collection numérique も参照した。 <http://collections.banq.qc.ca/ark:/52327/2223197>